

紅野謙介さんの書評に応じる—研究者の著述モラルについて

鈴木貞美

『週刊読書人』二〇一〇年一月二九日号に、私の『「日本文学」の成立』（以下『成立』）について、紅野謙介さんの書評が掲載されていた。「重要な問題設定」を行ったことを認めてくれ、書評の労をとってくださったことに感謝したい。そして率直に忠告を書いてくれたおかげで、どんなところに誤解が生まれのかがわかった。ありがとう。

忠告とは、謙介さんが、読みながら「これくらいのことを知らず、考えることなく文学に付き合っているのかと」「ずっと叱られているように感じる」、そんな書き方では「読者の共感を得られない」と言ってくれたことだ。私としては絶えず自分で自分を叱ってきたので、その調子のなごりが漂っていて、それが感じられるのかもしれない。

だが、日本の学界全体に、概念をそれとして対象化する意識が浸透せず、それぞれの専門の成り立ち、その根幹を問う作業を避けようとするきらいがある。専門の壁は実に厚い。専門外のところでレクチュアをして総スカンを食らい、なかに数人問題意識を受け止めてくれる院生がいるということなど珍しくない。また各国の文化史を転換する轆轤をまわす響きは、皆が皆、すぐに了解してくれるわけにはいかないから、耳に痛い読者は反撥もしよう。それらの困難を「跳ね返す勇氣と情熱の持ち主だけが、この研究に耐えうる」ということは序章に書いておいた。

だが、謙介さんが言うのは、そういう中身の話ではない。書き方、姿勢の問題だ。そのあとで例を三つあげている。まず、前著『日本の「文学」概念』（以下『概念』）を「自讃するあまり、その英訳書を名訳と賞する神経は、訳者に対する謝辞とはいえ、読者には共有できないだろう」という。もし、本当にそうなら、自慢気で高慢チキこの上ない。叙述のスタイル、そのモラルの問題と受けとめたい。

ただ、私はそんなつもりで書いたわけではない。私は学問というものに対して人一倍謙虚なつもりでいる。それは言うしておく。原著とその翻訳の評価は、まったく別のことだ。タイラー氏の翻訳が名訳たるゆえんは、概念をめぐる論議の翻訳はたいへんむつかしく、しかも原著の舌足らずのところを補って余りあるからだ。これは英語版「あとがき」に謝辞とともに記してある。

次に、諸外国の研究者が高い関心を示したと書いたことを「わざわざ自著でそう書きつける趣味を多くの読者は持ち合わせていないのではないか」とある。日本の「文学」概念

についての新しい見解が、諸外国で関心を集めるのは当然のことで、それと私の研究の出来はまったく別の話だ。ふたつとも、そんな反撥を受けるとは夢にも想ってもいなかった。それが迂闊だった。もっと慎重に書くべきだったと思う。

そして、なぜ、そんなことをわざわざ書くのかといえば、『概念』の足らぬところを補う努力をつづけ、『成立』をまとめたという次第を明らかにするためがひとつ。もうひとつは概念史研究をとりまく環境が『概念』の段階とはちがってきているからで、その変化に応えるためにまとめた書物であることを明確にするためである。

『成立』序章に記したように、今日、東アジアでは、学術概念の洗いなおしにかなりの動きが生じている。中国では国家プロジェクトに採用されているし、韓国ではブームという人もいる。その機運は、時代の大きな変化に伴い、中国や韓国のさまざまな分野の研究者の努力が重なってのものだが、私はそのなかで、東アジアにおける研究方法は、(ラブジョイ流の)概念史ではなく、「概念組織」が編み変えられる様子、つまり「概念編成史」研究として行うべきだと訴えている。その有効性を『成立』したのである。

ここに(ラブジョイ流ではなく)と入れたのも、私の提示に対する反応から、系譜だけを追うやり方では限界があることを明らかにすべきと気づいたからだ(『生命観の探究』でラブジョイの方法に言及したので、『成立』では、つい面倒になってしまった。この癖は、なかなか抜けない)。

紅野さんは三番目の例としては、こう書いている。「近代文学研究の大先達である柳田泉の木下尚江評価(半世紀期以上りもの)を『けだし、慧眼とすべきである』といまさらながら書く押しの強さ」、とくに「すべき」という言い方が気に障ると。「けだし、慧眼とすべき」は、昔から先達の仕事に対して後進もふつうに用いてきた慣用句。「べき」は、いうまでもなく、当然判断の「べし」の活用型。「大先達」の何年前のものであろうと、たとえ謙介さんにとっては「いまさらながら」に思えるようなことでも、よく検討し——『成立』では何カ所かで柳田泉説を批判している——、有効な指摘には、改めて注目を促すのが後進の努めにすべきと私は心得ている。

私としては、謙介さんと問題意識が重なる透谷や独歩について、また、花袋『蒲団』の作風を「自然主義」ではなく、「後自然主義」の流れにあると述べたところでは、謙介さんの発見した文献をも参照しているので、そのあたりについて意見を聞かせて欲しいところだった。